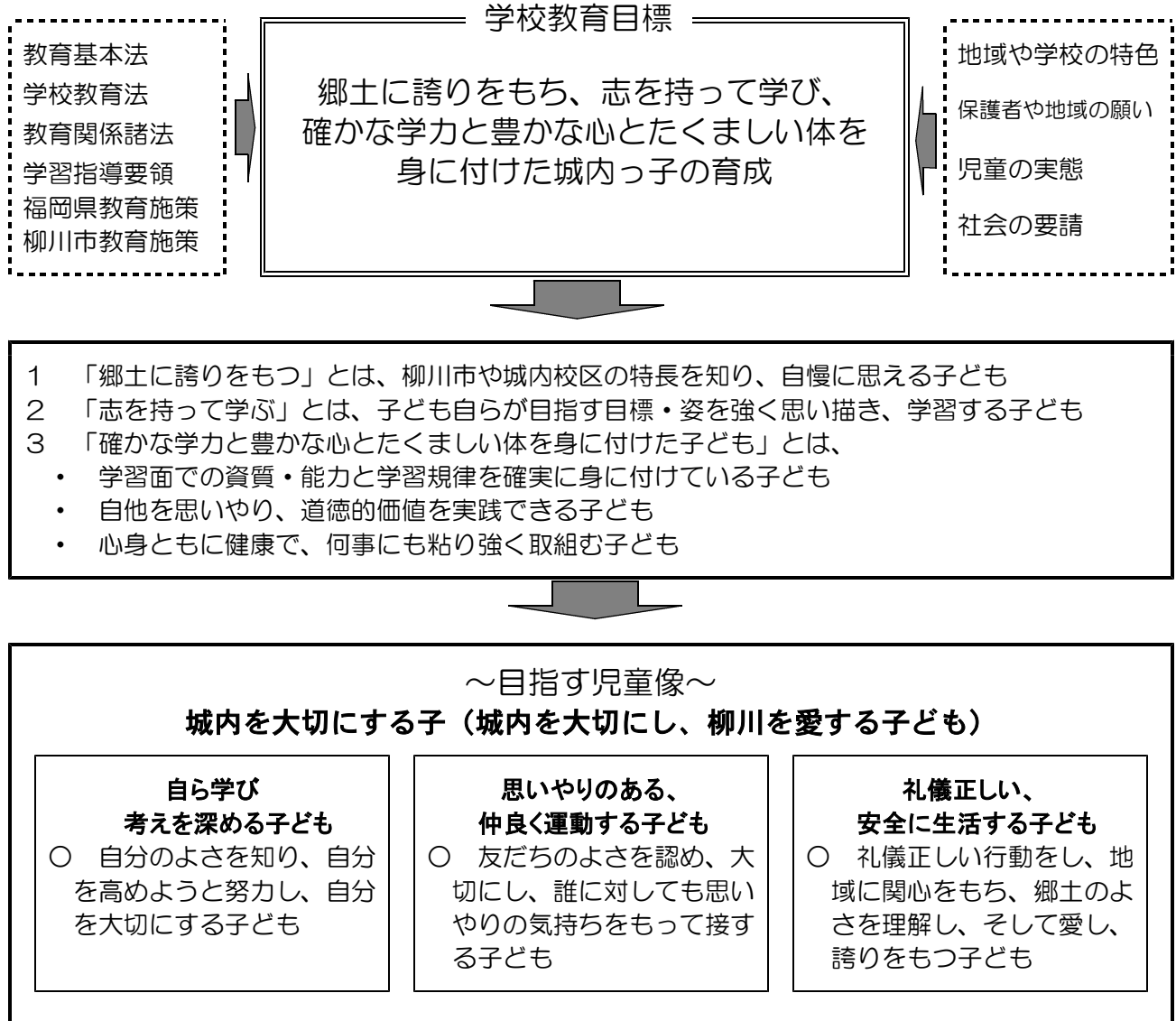


令和6年度 学 校 経 営 要 綱

柳川市立城内小学校

1 学校教育目標

(1) 学校教育目標



(2) 目指す学校像

～「えがお」「なかよし」「みんなでつくる」学校～

『①子どもの成長を根幹に据え、②職員の組織力を高め、
③地域と連携し、④教育成果をあげる学校』

- 子どもが学ぶ楽しさと自己の成長を実感できる学校（学力、体力）
- 子どもが集う楽しさ、かかわる楽しさを実感できる学校（社会性、道徳性）
- 子どもの礼節を重んじる学校（社会性、道徳性）

- 子どもの健全育成を共通目的とし、地域と連携しながら教育活動を推進していく学校（連携）
- 職員が課題を共有し、解決に向けて組織を機能的させ、効果を上げる学校（組織力、協働力）

（３） 目指す教師像

『子どもとつながり、自己の課題を自覚し、
自己研鑽を図り、協働を重んじる教師』

- 自分の持ち味を発揮して、学び続ける教師（専門性）
- 子どもとつながり、よい関係が築ける教師（社会性）
- 心身ともに健康で、心にゆとりのある教師（人間性）
- 城内小学校の一員として、共通の目標に向かって教育活動に取り組む教師（協調性）
- 城内校区のよさと強みを伝承していく教師（使命感）

（４） 目指す学びの姿

ICTを効果的に活用した『個別最適な学び』と『協働的な学び』
（自己調整学習）

授業が終わった後、向上感、達成感及び成就感を保障できる授業を目指す



〈 育成をめざす資質・能力 〉

●学びに向かう力

◎学びを調整する力（学習方略・メタ認知）

- 自分の考えがうまく伝わるよう、資料や文章、話の組立てなどを工夫して発表している。
- 課題解決に向けて、自分で考え自分から取り組む。
- 各教科で学んだことを生かしながら、自分の考えをまとめる。
- 話し合い活動を通じて、自分の考えを深めたり広げたりする。
- 学習した内容について分かった点やよく分からなかった点を見直し、次の学習につなげる。
- 授業で学んだことを、ほかの学習で生かしている。

◎粘り強く挑む力（自主性・自制心・勤勉性・忍耐力・持続性等）

- 将来の夢や目標を持っている。
- 家で自分で計画を立てて勉強している。
- 国語、算数、数学の勉強が好き。

●人間性等 非認知的能力

◎自己有用感・自己効力感

- 自分にはよいところがある。
- 先生は、自分のよいところを認めてくれている。

◎向社会性：共感性・協調性・貢献性等

- 人が困っているときは、進んで助ける。
- いじめは、どんな理由があってもいけない。
- 人の役に立つ人間になりたい。
- 自分と違う意見について考えるのは楽しい。

〈 「学び合い」の学習過程 〉

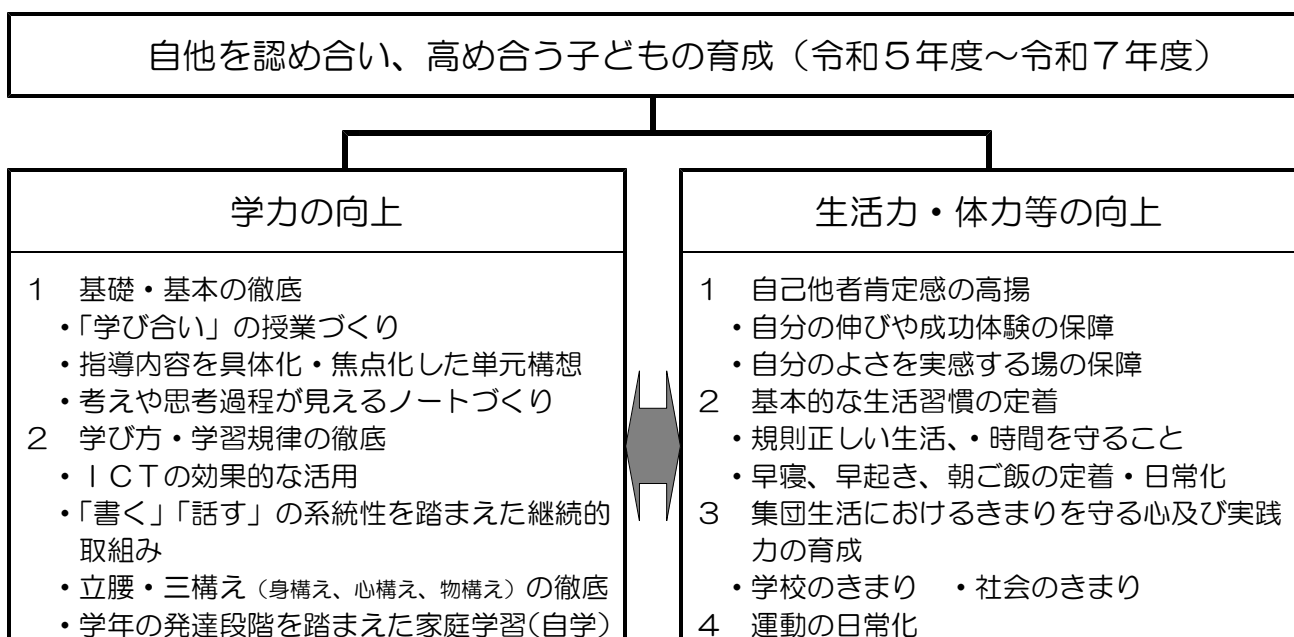
- 学習内容に関心をもち、めあてをつかんでいる。
- 教師の指示や発問を聴き取り、見通している。
- 一人一人が、自分の考えをつくっている。(根拠、絵図等を使って)
- 自分の考えをノートに整理し、相手にわかりやすく説明できる。
- 他の考えをもとに、自分の考えを深めている。(付加・修正・強化)
- 自分の伸びや高まりを感じている。

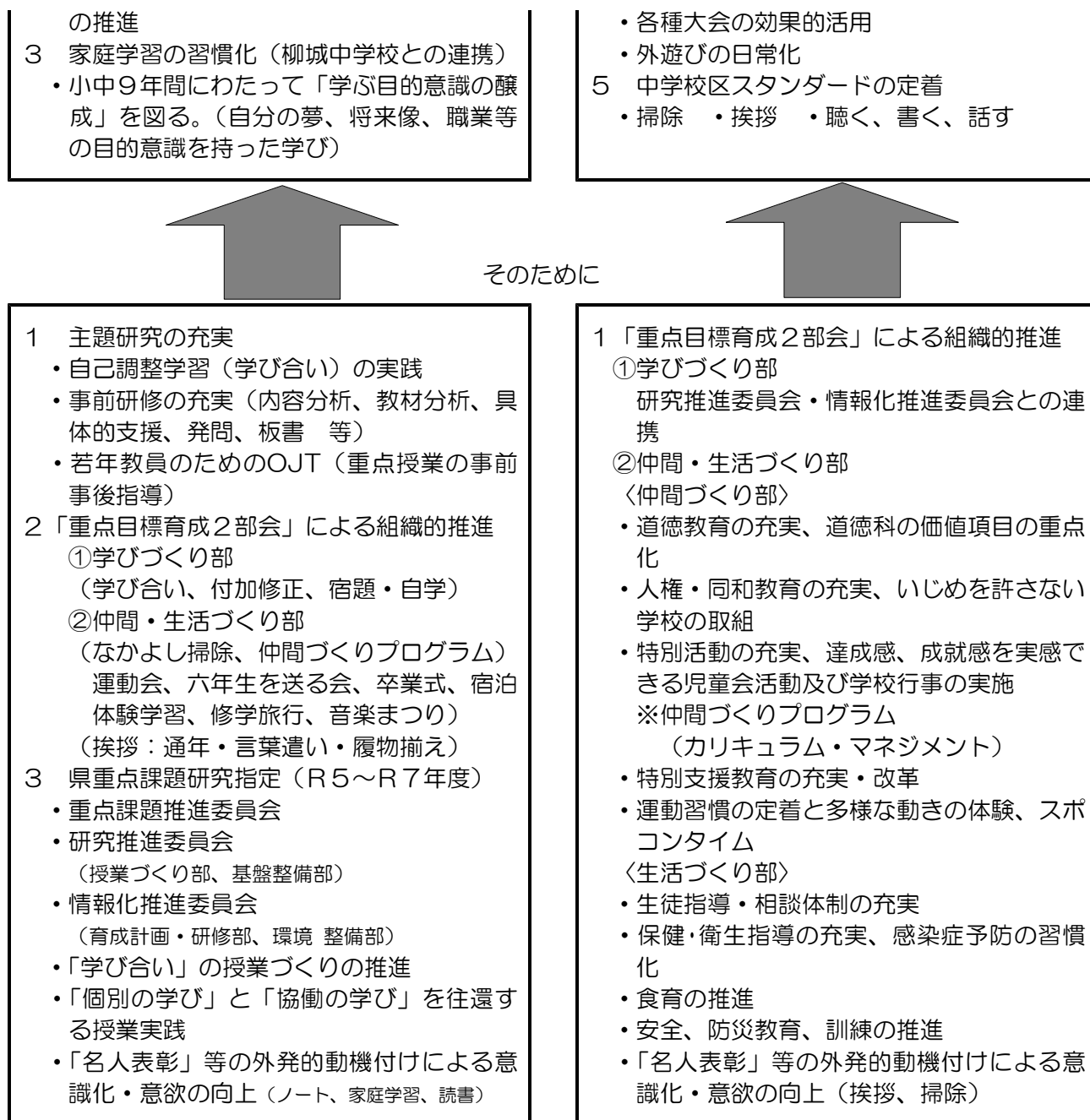
2 学校の実態

	児童の実態	教師の実態
よ さ	◇ <u>学力面・学習面から</u> ○ 全国標準学力調査（全学年12月実施）において、市平均正答率を上回っている。 △ 学力における学年格差が見られる。 ○ 学び方から ・ 話を最後まで聴いたり、学習に集中したりすることができる児童が多い。 ・ 自分の考えをつくったり、自分の考えを相手にわかりやすく表現したりしようと努めている児童が見受けられる。 △ 与えられた課題には、素直に取り組むが、主体的に学ぼう、考えようとする児童が少ない。 ○ 学習規律から ・ 三構え（身構え、心構え、物構え）に努めている児童がいる。 ◇ <u>豊かな心の育ちから</u> ○ 子どもらしく正直な児童が多い。 ○ 友だちに対して、思いやりの気持ちをもって関わることのできる児童が多い。 ○ 進んで挨拶できる児童が増えてきた。 ◇ <u>精神力・体力面から</u> ○ 休み時間に外遊びする児童が増えてきた。 ○ 最後まであきらめずに取り組もうとする児童が増えてきた。	◇ <u>学級経営面から</u> ○ 児童理解に努め、休み時間等の遊びを通して好ましい人間関係づくりや学級経営の構築に努める職員が多い。 ○ 児童一人一人を大切にし、保護者の意向に耳を傾ける職員が多い。 ◇ <u>授業力から</u> ○ 自分の授業力を向上させようと意欲的に授業づくりに取り組む職員が比較的多い。 ○ 指導内容からめあてとまとめを意識し、主発問や主活動、構造的な板書等を具体化した授業づくりに努める職員が多い。 △ 若年教員が比較的多いため、授業力を高めていく必要がある。 ◇ <u>職務遂行力・組織力から</u> ○ 組織運営におけるラインや協働体制を大切にしようとする意識をもった職員が多い。 ○ 協働意識が比較的高く、他の職員の職務に対して手伝う姿がよく見受けられる。 ○ 自己の校務分掌等の職務に対して責任をもって自力解決しようとする職員が多い。 ○ 若年教員に対して進んで支援を行う中核教員が多い。

課 題	教 育 課 題	経 営 課 題
	◇ 学力面・学習面から △ 全国標準学力調査(全学年12月実施)においては、全国平均を上回る結果である。しかし、正答率に学年間差が見受けられる。また、学級内における二極化傾向も見受けられる。 △ 教科別に観ると、国語科では、「話すこと・聞くこと」、四教科において活用が基礎に比べて低い実態である。 △ 学力や学習意欲において下位層にいる児童がいる。(一部の低位が存在) △ 継続的に取り組むことが苦手な児童が少数いる。 ◇ 豊かな心の育ちから ○ 正しい言葉遣いや気持ちのよい挨拶を実践できている児童が増えてきた。 △ 相手の気持ちを考えられず、自分勝手な行動をとってしまう児童が各学級数名いる。 ◇ 精神力・体力面から △ 最後まであきらめずにやり通す忍耐力に欠ける児童が少数いる。	◇ 学級経営面から △ 若年教員が多いため、学級経営において多様な問題に長けた職員が少ない。 (保護者対応等も含めて) ◇ 授業力から △ 若年教員が多いため、日々の授業で、指導内容を定着させることが困難な学級がある。 △ 授業づくりを行うために必要な内容分析力、教材分析力が未熟な職員が多い。また、それを支援できる年齢層の教職員が少ない。 ◇ 職務遂行力・組織力から △ 若年教員が多いため、リーダーとして組織を機動させていく職員が少ない。 △ 若年教員を育てるOJTシステムを構築していく必要がある。 △ 各職員のカリキュラムマネジメント能力の育成を推進していく必要がある。

3 中期的な重点目標





4 重点目標 （福岡県重点課題研究指定令和5年度・6年度・7年度）

【1年次：令和5年度】 自分の考えを深める子どもの育成

【2年次：令和6年度】 自ら学び考えを深める子どもの育成

【3年次：令和7年度】 自ら学び考えを広げる子どもの育成

5 本年度の重点目標

自ら学び、考えを深める子どもの育成

〈目標指標〉

【学習面】

○ 自分のめあてに向かってチャレンジし
友達と納得するまで学び合うことができる
子ども [8割]

○ 自他の考えを比べて、付加・修正・強
化することができる子ども [8割]

柳川市共通実践項目（小学校）

- ◇ 「ふるさと『やながわ』学習」の充実
 - ・ 総合的な学習の時間における探究活動の
質の向上
 - ・ タブレット端末の効果的活用（交流、発信、
学習記録）
 - ・ CBT化への対応

【仲間・生活面】

○ 笑顔で、気持ち良い挨拶ができる子ども
[9割]
(先生に・友だちに・地域にのちに)

○ 自他を大切にする言葉遣いや行動ができ
る子ども [9割]

○ 時間いっぱい掃除に取り組む子ども

柳城中学校区スタンダード [9割]

3年計画の2年度にあたる本年度は、本校の課題を踏まえ、以下の4項目に重点をおき、学校経営に努めていく。

喫緊の課題1…学習課題（めあて）を決め、自分から課題解決に取り組む単元学習の徹底

喫緊の課題2…自分の考え相手の考えと比較し、付加・修正・強化することのできる「学び合い」
の学習過程の日常化

喫緊の課題3…自己有用感・自己効力感・自己肯定感を高める取組み（成功体験、賞賛の経験）

喫緊の課題4…教員の授業力と学級経営力の向上

児童一人ひとりが、自己の高まりを実感できた時、自己肯定感を高めることができ、そのことが学校生活全般における意欲付けとなると考える。そこで、昨年度は、「目標を決めて取り組む」、「あきらめずに取り組めば結果が出せる」等の成功体験を味わわせることを重視し、学校行事、市の対外行事、特別活動等、様々な場面において計画的・継続的な実践を推進してきた。その結果、児童一人ひとりが、学習面や運動面、生活面においてそれぞれ自己の高まりを実感し、学校生活でのモチベーションを若干ではあるが高めることができたと捉えている。

そこで、本年度は、昨年度の実践を礎として、学習面と仲間・生活面の両面から具体的な目指す児童像を設定し、児童のより一層の向上を具現化することを構想した。

「自ら学び考えを深める」とは、学習課題（めあて）を決め、自分から課題解決に取り組む単元学習の中で、児童が自分の考えをつくり、つくった考えを相手にわかりやすく伝えることができることを前提に、自分の考えと他の考えを比較し、付加・修正・強化することである。（学び合い）そのためには、まず、自分の考えをしっかり持ち、次に、他者（教師の話、友だち）の話を最後まで聴き、違

った考えを理解し、そして、自分の考えと他の考えのよさや妥当性を明らかにしながら、最終的な自分の考えをつくるといった過程を踏まえていくことが重要である。

なお、令和3年度の重点目標「自分の考えをつくる子どもの育成」および令和4年度の重点目標「自分の考えを伝える子ども」さらに、令和5年度の重点目標「自分の考えを深める子どもの育成」が、本年度の重点目標の礎となるため、これらの姿も意識しながら本年度の重点目標の具現化を目指していく。

6 経営の重点

**「4S（シンプル・スピーディ・シンセリティ・スマイル）を合言葉に
全校児童を全職員で育てる」という理念を根幹においた教育の推進（チーム城内）**

○児童を主役に据え、よさを褒めることを指導の前提とする。

○単純明快に物事をとらえ、迅速且つ誠心誠意をもった対応を行う。

○全職員が、児童、保護者および地域の方々に対して誠心誠意をもった対応を行う。

○常に、「笑顔」を意識し、相手に接する実践力を遂行する。

○全職員がすべての児童に関わることを原則とし、共通理解を図り、一貫した指導を徹底する。

○組織としての協働体制を強化し、連帯感・達成感・所属感を味わえるようにする。

（１） ベクトルを揃えた共通実践と見える化

児童への指導を徹底するためには、全職員が同じスタンスで指導にあたることが、原理・原則である。

学習・生活面においても、学級担任も含めた誰が指導しても同じ内容を同じように指導を行っていくことが児童の学習・生活面の向上に有効であると考え。日々の授業づくりにおいても学び方を含めた学習規律の向上においても同様である。本年度は、重点目標育成2部会を中心とした共通実践や学校としての共通実践を全職員誰もが同じように行うよう推進していく。また、学校の共通実践に関する成果や課題について「見える化」を図ることで、全職員の捉え方を揃えることができる。教育活動の様々な場面で見える化をし、職員や児童の取組の方向性を明らかにしていく。

最後に、全職員『4S』を合言葉に、職務遂行においてこの4つを念頭においた取組を実践していくようにする。

Simple…単純明快な取組

Sincerity…誠心誠意の対応

Speedily…迅速な対応

Smile…笑顔

（２） 重点目標「育成二部会」を中心とした組織運営の機能化

本年度は、重点目標育成二部会を立ち上げる。育成二部会は、「学びづくり部」と「仲間・生活づくり部」で構成する。重点目標達成に向けて、各リーダー（部長）を中心に育成二部会で話し合った共通実践の取組の内容を担当者が企画・提案・評価・改善を行い、組織的・協働的な取組を推進する。育成二部会と近接学年部会及び担任が連携して、育成二部会で企画・提案した内容を近接学年部会及び担任が具現化し、共通実践と評価を行う。担当者が責任をもって推進内容を計画的・継続的に行い、企画→提案→実施→評価→改善を進めていく。

若年教員にも企画力、提案力、推進力や評価力や改善力を向上させていく機会と考えている。各部会での取組を通して、児童の学力、学び方あるいは非認知能力の向上を図るのは勿論のこと、職員の企画力や推進力あるいは運営力といった職務遂行能力の向上をも図っていきたいと考えている。

（３） 若年教員の指導力向上のための組織としての指導体制の整備

本校の学級担任は、若年教員が全体の3割で、本市の動向からも今後一層の増加傾向にある。このような現状を踏まえると若年教員の授業力の育成が喫緊の課題である。このことを踏まえ、校内

研修の充実を図ることとOJTを効果的に取り入れ、計画的、継続的そして発展的な個別指導を若年教員に行っていく必要がある。

そこで、本年度は、主幹教諭及び学力向上コーディネーターを中核とし、若年教員への課題提示と指導ライン及び指導体制を明確にした取組を具体化していく。

具体的には、①主題研究での事前研修で、指導案審議を行う前に、指導内容の分析、教材解釈及び教材分析で授業構想を練るための指導助言を行うこと、②長期休業期間を利用した課題研修を位置付けること、③週計画案をもとに重点授業を設定し教室訪問を行い、①主眼とめあての整合性、②めあてとまとめの関連性、③板書の構造化、④発問、指示の在り方、⑤指導内容を効果的にする教材や支援のあり方⑥「学び合い」の学び方の育成（ノートづくりも含む）や学習規律の定着の6つの視点からの授業づくりに関する指導、助言を行い、授業改善を図っていく。その際、授業分析シートを活用し、成果及び課題の見える化を図る。

また、若年教員で行う「〇〇会」を月1回、定期に実施し、①授業づくり、②学級経営、③保護者対応、本校の共通実践項目等の確認や相談を行う機会とし、精神的負担、合理的職務遂行の具現化を図る。

（４） 生徒指導の焦点化と共通実践

生徒指導の四つの指導上の留意点（①自己存在感の感受②共感的な人間関係の育成③自己決定の場の提供④安全・安心な風土の醸成）を日々の授業実践で意識した取組みを行い、児童一人ひとりに自己の伸びを実感させるとともに、自己他者肯定感を高めていくようにする。自分の伸びやよさに気づかせる場を設定し、児童がそれらを実感させることで学習を中心とした教育活動への意欲の高揚を図る。また、基本的な生活習慣の育成については児童の実態から優先順位を設定し、この1年間で実現できる内容を焦点化・重点化し、全職員の共通実践をもとに徹底した指導を計画的・継続的に行う。

（５） 特別支援教育の立場からの児童理解

個を大切にしているインクルーシブ教育の理念を念頭においた教育活動を展開する。そのために、それぞれの障がいに対する理解を図る研修を長期休業時を中心に位置付け、児童理解を図る。そして、個々に応じた対応を図ることができるように指導体制を明らかにするとともに専門機関等との連携を図った指導を展開していく。また、家庭との連携を図った取組を重視する。

7 道徳教育の基本方針

本年度は、重点目標を「自ら学び考えを深める子どもの育成」とし、昨年度の重点目標「自分の考えを深める子どもの育成」からステップアップを目指す。また、本校児童の課題である自尊感情や自己肯定感を高めていくことを目指した実践を礎に学習面や生活面の学校生活全般でのよりよい方向性を児童が見出していくことを目指している。これは、学習意欲の高揚をはじめとする学校生活全般においての児童の主体的な姿を目指すものでもある。

そこで、道徳科では、人間としてよりよく生きていこうとする人格の基盤や自分のよさや伸びについて考え、自分に自信をもち、他者を大切に、向上心をもって継続的に取り組もうとする人間としてのあり方や生き方の自覚を培っていく。

特に、本年度は、相手を大切にすることの基礎・基本となる、B主として人との関わりに関すること「礼儀」を重点化・焦点化し、学習場面や生活場面等、学校生活全般で礼儀の大切さを理解させ、実践力を培っていく。また、教科指導と道徳科の学習を関連づけ、継続的な取組を通して実践的態度の育成を図っていく。具体的には、道徳科と学習活動、道徳科と特別活動等の関連を図り、道徳科で学習した価値項目の醸成を定着させるためにその他の教育活動においても目指す姿を具体化したり、自分の心情や行動を振り返ったり等の取組を重視していく。

8 特別支援教育の基本方針

本校は、情緒的配慮を要する学級が新設され、特別支援学級が2学級あり、知的面に配慮を要する特別支援学級が1学級、情緒面に配慮を要する学級が1学級ある。また、特別支援学級に対する偏見を抱いている児童も若干名おり、特別支援教育に対する見方・考え方を改善していく必要がある。

このような現状の中で、本校の特別支援教育の基本的考え方として、障がいのある児童を特別な対象としてとらえるのではなく、すべての児童が一人ひとりのよさを認め合い、個々のよさを伸ばす教育を目指す。これは、インクルーシブ教育の理念を踏まえたものである。また、このことは「自分の伸びを追求することができる子ども」の具現化を目指す上からも大切であると考ええる。

そのために、以下に示す内容を重点的に取り組んでいく。

- (1) 在籍児童の一人ひとりの個性や現状をもとに個別の教育支援計画及び個別の指導計画を作成し、指導の充実を図る。計画をもとに指導を実践していくなかで児童の成長や課題を捉え、随時改善を行いながら、個々に応じた教育の充実を図っていく。
- (2) 個に応じた教育の充実を図る。
「聴く」、「書く」、「話す」等に困難を有する児童に対する支援の具体化を図った授業づくりを行う。
その場合、学級内での一斉指導が困難な場合は、指導体制をもとにした職員体制での指導を行う。
- (3) 特別支援教育コーディネーターを中心に以下の視点から特別支援教育の充実を図る。
 - ① 特別支援教育に関する基礎・基本となる知識を習得する研修の位置付け
 - ② 専門機関との連絡調整を行っての取組の具体化
 - ③ 特別支援教育を充実させるために必要な情報の提供
 - ④ 特別支援教育を推進するための委員会や研修会の運営
 - ⑤ 保護者や地域等との相談や連絡の窓口的役割の充実
- (4) 特別支援学級「おおぞら1組」、「おおぞら2組」の経営方針の重点化を図る。
本校の特別支援学級において以下の経営方針で個を伸ばす教育の充実を図る。
 - ① 指導内容から学級での指導と交流学級での指導を分けし、指導内容の定着を図る。
 - ② 児童の発達段階に適した指導内容を常に吟味し、個別の指導計画のP・D・C・Aサイクルを実施する。
 - ③ 板書や掲示物は、「ビジュアル」、「シンプル」、「クリア」を意識して行う。
 - ④ 児童の発達段階や習熟段階を踏まえた学び方や学習規律の指導を行う。
 - ⑤ 児童の実態に即した効果的な教材の提示や支援の具体化を図る。
 - ⑥ 児童の実態の対応した施設・設備を整備し、安心且つ安全に教育活動を推進できるようにする。